

留学説明会、日本全国6ヶ所同時開催

目次

米国大学院留学説明会
 2010年12月28日(火) 15:00 - 17:00 参加無料・申込不要
 京都大学吉田キャンパス 国際交流センター-KUINEP講義室
 主催: 米国大学院学生会 後援: 京都大学国際交流センター
 国際交流センター info@international.ku.ac.jp
 ※京都大学学生以外の方もご参加いただけます。
 ※アジア各国及び諸国留学等の詳細は、米国大学院学生会Webサイト(<http://gakuyugaku.net>)
 でご確認ください。

世界の頭脳が集まるアメリカで学位をとろう!
 アメリカ留学中の現役院生と、大学院を卒業して世界で活躍
 する留学経験者がホッソネで語るアメリカ大学院留学の魅力。
 留学経験者の生の声をお届けします!

世界はあなたを待っています

会場までのアクセス
 ※本説明会会場から、以下のようなアクセスをご利用。(所要時間はともにも約35分)
 ・京都府バス(20分) 京大前(山科) 北山(バス乗り場) 京大前(バス乗り場) 京大前(バス乗り場)にて下車。
 ・京都市バス(15分) 京大前(山科) 北山(バス乗り場) 京大前(バス乗り場)にて下車。
 または、京阪電車山科駅より徒歩。
 ※国際交流センターは、京都大学吉田キャンパスに隣接する京大前(山科)の建物です。

- ◆12月20日(月) **早稲田大学**
 主催: 早稲田大学 留学センター・理工学術院
 後援: 早稲田大学国際部、早稲田電気工学会(EWE)、
 米国大学院学生会
- ◆12月21日(火) **慶應義塾大学**
 主催: 米国大学院学生会
 後援: 慶應義塾福利厚生機関国際関係会(I.I.R)
- ◆12月22日(水) **名古屋大学**
 主催: 名古屋大学留学生センター海外留学室
 共催: 米国大学院学生会
- ◆12月23日(木・祝) **東京大学**
 主催: UT-OSAC
 後援: 東京大学卒業生室、
 東京大学国際部国際交流課、米国大学院学生会
- ◆12月24日(金) **九州大学**
 主催: 米国大学院学生会
 後援: 九州大学留学生課
- ◆12月28日(火) **京都大学**
 主催: 米国大学院学生会
 後援: 京都大学国際交流センター

留学説明会[速報]	1
寄稿 『世代が僕に 追いついた』 (橋本 道尚)	2 3
コロラド大学ボル ダー校 Aerospace Engineering紹介 (平林 正稔)	4 5
お薦め本 『天地明察』 (工藤 朗)	6
編集後記 (編集部)	6

合計1000名以上の方々に参加していただきました。会場によっては、UStreamなどのオンライン配信も行われており、現地・インターネットを通して様々な方と交流することができました。開催に向けて各会場でご尽力頂いた皆様・説明会にお越しいただいた皆様に御礼申し上げます。



(早稲田大学での講演の様子)

新聞・テレビにも活動が紹介されました。

- 12月13日 毎日新聞 関西版夕刊
- 12月21日 NHK「おはよう日本」
- 1月9日 朝日新聞朝刊

Purdue大学・根岸教授のノーベル賞受賞や若者の内向き思考という報道がなされる中で、時期が重なったこともあり、大変多くの方々にご注目を頂きました。一過性のものではなく、今後ますます情報発信していきますので、今後も活動にご注目ください。

- ◆ ニュースレターも第三号となりました。ご執筆に協力してくださった方、どうも有難うございました。
- ◆ 2010年冬に行われた留学説明会、各会場の詳細に関しましては次号に掲載予定です。

1998年8月、高校3年の夏。入会したばかりのZ会の教材を目の前の机の上に置いたまま、甲子園の野球中継を見ていました。私は中学・高校では柔道部に所属していました。「全国大会に出場する」という目標を決めて柔道に打ち込む生活を5年以上続けていたのですが、高校3年の夏をもって目標は一度も達成できないことになりました。それは大多数の高校生と同じ結果なのかもしれませんが、真剣に取り組んだ分、悔しさと勉強に集中できませんでした。

新聞や雑誌を賑わす同級生にはスポーツ選手がたくさんいました。清水エスパルスの市川大祐選手が高校生として日本代表に選出され、能代高校の田臥勇太選手は高校九冠を達成してNBAに行くこと期待されていました。柔道では後に世界チャンピオンになる棟田康幸選手や鈴木桂治選手が有名でしたし、後に横綱になる

Долгорсүрэнгийн Дагвадоржさんも高知で下積みをしていたと思います。競技も才能も違う相手を見ながら、同じ時代と同じ長さしか生きていない彼らが自分の遠く先に見えることに焦り、ライバル視し、奮起する、初々しい高校生だったと思います。

当時私は医学部に進学したいと思っていました。厳密には、人を助けるのは良い事だし、やりがいのある仕事だろうし、人に喜んでもらえれば嬉しいし、だから医者になるのは悪い選択ではないと考えることで、医学部に進学したいと思おうとしていました。それは全てが嘘ではなく正しい部分もあったと思うのですが、正論をつぎはぎしたような目標では、あまりやる気になりませんでした。

テレビの中では、同級生の高校球児たちが野球をしていました。延長17回を投げ勝ち、9回での大逆転、ノーヒットノーランの決勝戦。伝説の夏の甲子園大会は、松坂大輔選手のいる横浜高校の優勝で幕を閉じました。同学年を総称して「松坂世代」と呼ばれる、そんなインパクトのある活躍でした。「将来はメジャーリーグに行って活躍したい」と自信を持って答える松坂選手がカッコ良かったのは、目標に迷いがなく、それに着実に進んでいるように見えたからです。一方自分がとても不甲斐なく思えたのは、無理矢理作った目標で自分を納得させようとしていたのに、自分の頭が拒否しているのを知っていたからでしょうか。そんな時、一つのアイデアが光臨しました。

「松坂よりも先にメジャーリーグに入る」

同級生の中で日本一になる、これを目標にしたら人生が面白そうだ。自分はメジャーリーグのチームドクターになろう。スポーツ医学を勉強して、あと、英語も話せないといけないか。メジャーリーグはアメリカにあるし、大学はアメリカにしてスポーツ医学を勉強すればいい！

文字に起こした結論だけを見ると思慮浅く、限定的な情報、思い込みを元にした青臭い決断であることに異論はありません。ただ論理性などは当時の自分を説得するのにさほど意味はなくて、自分の意志で進路を決めたという自負が大事でした。甲子園決勝前日までさほどアメリカにも留学にも興味はありませんでしたが、自分で立てた目標を達成するための手段としてアメリカの大学に進学するという選択には、自分が納得したし、何よりワクワクした、それだけで100点以上の価値のある選択だったと思います。思いつきと大差ない決断を応援してくれる理解ある家族に恵まれ、人生2度目の飛行機に乗り、人生最初の海外渡航が留学となり、以来アメリカに11年住んでいます。オレゴン州立大学、ハーバード大学を経て、現在はMIT及びボストン小児病院で、ポスドク研究員として研究をしています。



橋本 道尚 (はしもと みちなお)
Harvard 大学 化学物理 博士課程修了

大学はオレゴン州立大学 (Oregon State University) のスポーツ科学科に所属しながら、医学大学院へ進学するための「Pre-Med」と呼ばれるプログラムに在籍しました。スポーツ科学科ではトレーナー養成の座学と実習、Pre-Medでは理系基礎科目を受講しました。英語能力が不十分な渡米直後に、対話が重視されるスポーツ科学科の科目、特に実習の課題や試験は難しく、一方英語の読み書きと理数系の素養があればできる理系科目はやりやすい印象を受けました。結果、スポーツ科学の科目に比べて、理系の科目での出来が良く、有機化学の教授に研究室に誘って頂きました。教授と話し見学をして研究に対する興味が膨らみ、また、クラスでの達成度を考慮すると自分の適正がどの方向にあるのかも考えました。研究者とスポーツ医師の両立は難しく決断が必要で、これは留学を決めた根幹の理由を覆しかねない決断なので半年以上迷いましたが、研究者を志望することに決めました。自分の興味に基づいた決断なので後悔はありません。ただ今振り返れば、当時の英語力がもう少し高く、適切なサポートを求めることができれば専門を変更しなかったかもしれません。入学直後で大学の仕組みもわからず、サポートが必要な際にどのようにすれば良いのかわからなかったのも正直なところです。十分な情報収集をしておくこと、そして相談できる友人やメンターを見つけることも大事なことだと思います。

大学2、3年は有機化学、4年は物理化学の研究室に所属した後、大学院へは「面白くなってきた勉強と研究を継続したい」という動機で進学しました。当時の指導教官と相談しながら出願先をリストアップし、アメリカとイギリスの7校に応募しました。教授のサポート（自分の興味と応募先大学院の研究内容とのマッチング）はとても助かりました。結局、興味のある研究室が複数あったこと、自転車圏内に柔道場があったことを理由に、ハーバード大学の化学科に進学しました。私見ですが、学部生の場合、興味と経験が洗練されていないとしても、研究が出来るような素地と熱意で合格することもあると思っています。私の場合、志望研究室は1つにしぼりきれませんでした。その時の正直な考えを書きました。研究経験、大学の成績、実際に一緒に働いた2名の教授からの具体性の高い推薦状、が総合的に評価されたのだと思います。

「米国の博士課程受験は麻雀のようなもの」と言うのは、麻雀の弱い私のしがらみ持論ですが、日本の受験に比べると上がり方（合格の仕方）は多様だと思います。まずは自分の現在の持ち牌を知ること、客観的な上がり役が何かを知ること。その上で、得意を伸ばして一発勝負するもよし、コツコツと全体の底上げをするもよし、勝っても負けても1年後に次局がありますので悲壮感を持たず、自分なりに牌を揃えてみて下さい。

寄稿「世代が僕に追いついた」(続き)

大学院での生活は研究中心です。所属は理学部化学科で、マイクロ流体工学と呼ばれる分野の基礎及び応用研究をしていました。もう一度やれと言われて喜んでやりたいかはわかりませんが(笑)、自分の仕事の仕方、広義では自分の生き方の礎を作った大事な期間でした。企業文化が違うように、大学院の生活は所属大学・研究室によって大きく異なりますので、以下は私の所属研究室での経験を踏まえた一経験と捉えて頂ければと思います。

1. 研究と社会との繋がりを考える

「自分の研究が社会のどの問題解決に貢献するか」を常に意識する文化がありました。所属は理学部でしたが、実用的・実利的で、考え方は工学部に近いのかもしれない。エネルギー、環境、医療などの大きなテーマに関連する実際の社会問題(例:米国の医療コストが高い)に対して、自分の専門性(例:ポリマー材料科学、計算機科学)を用いて何が出来るか考える一方、偶然の科学的発見(例:液滴の集合が特定条件下で3次元的に自己組織化する)があった場合、その発見がどんな社会問題の解決に役立つか考える、という具合です。もちろん結論としては、問題解決の最重要のキーが科学・技術にないこともあるでしょうが、自分たち(科学者・技術者)が社会の大事なステイクホルダーだと意識させられる環境からは学びも多かったと思います。研究室からは、ベンチャー、NPOも生まれており、技術の積極的なアウトプットも図っています(<http://www.nanoterra.com/>)(<http://www.dfa.org/>)

2. フラットな組織体制、自己管理の必要性

アメリカの多くの大学では、1名の指導教官が研究室全体をまとめます。私の所属研究室は40名を超える大世帯で、メンバー同士の協業が主になって研究が進みました。教授からは細かい指示はなく、要所で実験の方向性と結果の確認をし、大局から見た研究意義の議論をし、論文執筆に関する指導を受ける、という感じでした。コアタイムもなく時間管理も全て自分で行いました。外部の奨学金がない場合、雇用関係が生じますので、仕事に対する真摯な姿勢が見られない場合は解雇もありますが、自己裁量で課外活動や娯楽に時間を費やすこともありました。旅行が好きなので短期休みを使って国外に出かけることもありましたし、在学中にSTeLAという学生団体(www.stelaforum.org)の立ち上げを行うことができたのも、時間の融通が利いたことを生かされたからだだと思います。

3. 国際的な研究室メンバー

院生・ポスドクの同僚メンバーの出身国は、常に15カ国に及びました。研究についても独立した元同僚との共同研究が世界中に広がるなど有意義でしたが、個人的には、研究以外での経験に価値を見出しました。例えば、韓国人と竹島の領有権について議論もしましたし、ルーマニア人からチャウシエスク政権下の幼少時代の体験を聞いたこともあります。教科書の記述も新聞の記事も、現実世界と繋がりを感じることで興味も深まって、人生が豊かになりました。加えて、世界には酒飲みのイスラム教徒、女たらしの仏教徒、踊れないブラジル



人、時間を守らないドイツ人、女性と話せないイタリア人もいる、そんな人の当たり前の多様性に触れて、経験に基づく世界観の広がりを感じられたことは、留学して得た財産だと思っています。現状、アメリカには世界中の留学生が集まる仕組みですし、「アメリカに留学する」→「アメリカ人と出会う」だけでないことは留意しておいて良いかもしれません。

4. 将来の選択肢

博士課程終了後の就職先については、5年間で、大学助教授、ポスドク、製薬会社・メーカー研究員、研究室発ベンチャー、経営コンサル、投資銀行、ベンチャーキャピタル、特許弁護士事務所、政府機関(科研費書類の査読)、という業種・職種に就職する同僚を見てきました。数としては、大学とそれ以外では、半々くらいの印象です。地理的には、米国、ヨーロッパ、アジアが主な就職先でした。

同僚の進路を見るにつけて、自分の就職先に対して地理・言語による制限(厳密には「制限があるという思い込み」)が消えて、楽観的になれたことは良かったと思います。漫画スラムダンクの山王戦の気付きである「1対1もオフェンスの選択肢の一つ」と同様

に、日本での就職も人生の選択肢の一つに過ぎません。私は将来日本で就職することも考えていますが、他国での就職を検討して、現在実際に経験しているからこそその判断かもしれません。

5. 日本人との繋がり

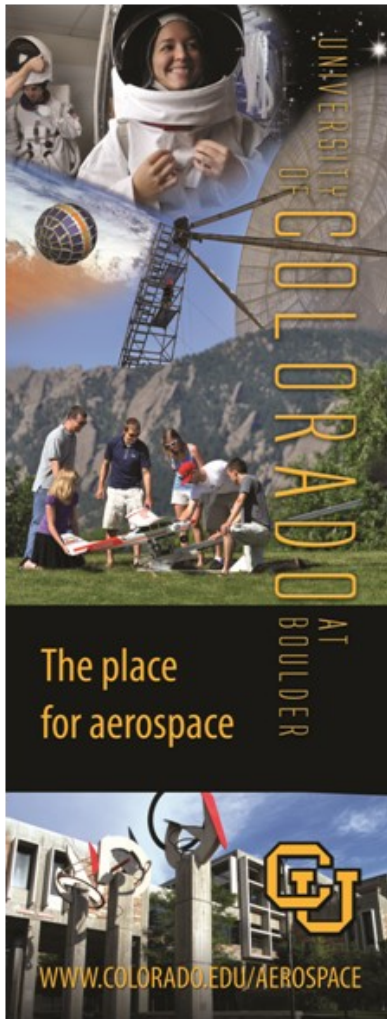
最後に、これはハーバード大学があるボストンのおかげですが、日本人との繋がりに恵まれました。ボストンは留学先としての大学が多く、専門を問わず同年代の友人に恵まれましたし、分野横断的に行われる日本人同士の勉強会などもあったことも幸運でした。とりわけ米国での暮らしが長くなり、以前住んでいたオレゴンの田舎では日本人と知り合う機会も限られていた私にとっては嬉しい機会でした。コールがかかる飲み会に象徴されるような、日本らしい人付き合いも22歳までさほど経験しませんでした。意外に楽しく順応できるものでした(笑) また、博士課程の学生と同じく、法律・ビジネス・行政などの大学院生は、専門に一家言ある方が多く、話をするだけでも楽しいものです。高校時代に同年代のスポーツ選手を見て自分が奮起したように、生き生きした同年代の活躍に元気づけられています。

以上5点、私が大学院から就職した現在までの留學生活の所感です。それぞれメリットを強調して記述しましたが、批判的に読んで各項目からデメリットも読み取って下さい。繰り返しになりますが、留學そのものは理想的には手段であって目的ではありません。「最近の

若者は内向きだ」という周りに迎合も反発もせずに、自分に何が大事かを自分で決めて下さい。和菓子職人を目指して京都で修行しても、研究者を目指してボストンに留學しても、北京で卓球を練習しても、若いうちくらい自分が達成したいことを我儘に考え抜いて、必要だと思ったことを妥協せずやって欲しいというのが、少しばかり年長者の私の希望です。世界的に見たら現代の日本に生まれて大学教育を受けていることも、将来を考える余裕や能力があることも、当たりくじを引いたようなものだと思います。恵まれた機会を十分に享受して、還元できる場所はしながら、みなさんが充実した人生を送られることを心から祈念しています。もし私が何か情報提供できることがあれば、下記よりご連絡頂ければ幸いです。(www.michinao.com)

2007年4月 松坂選手がボストンレッドソックスにやってきました。私は8年前に松坂選手の活躍を見て、松坂選手よりもすごくなりたいという若々しい競争心から、衝動的にアメリカに来ることを決めました。今はもうメジャーリーグのチームドクターを目指すことはないと思います。でも8年前に私を鼓舞してくれた同世代のエースが自分の住んでいるボストンにやってくることになることになった、それは奇妙な巡り合わせで、誰かがくれたご褒美なのかもしれません。嬉しくて、照れながら尊大に、心のなかでつぶやきました。

「世代が僕に追いついた！」



Aerospace Engineering Science、University of Colorado at Boulderの博士課程に在籍する平林正稔と申します。私はこの学科のAstrodynamics and Satellite Navigation System Group、Astrodynamics and Celestial Mechanics Groupに所属しています。私の所属する学科について紹介します。(以降では、University of Colorado at BoulderはCU Boulder、Aerospace Engineering Sciencesは当学科と呼ぶことにします。)

1. Aerospace Engineering Science at CU

当学科を端的で言うと「山の麓の小さな町の世界に誇る最先端！」ではないでしょうか。18名の宇宙飛行士を輩出していることで有名ですが、それだけでなく大学の基幹的な役割を果たしています。また、全国の研究所・企業だけでなく、研究都市Boulderにある研究所と関わりが強いのも特徴です。このような恵まれた研究環境と高い研究レベルから、2010年度の National Review Council (NRC) Assessment では、Aerospace Engineering 分野の Ph.D プログラムにおいて、全米4位の評価を得ています。また、在学する留学生はGraduate programでは、一学年約50人に対して約10名程度となっています。

2. 研究分野

研究の特徴として、プロジェクトをもとに研究分野が分かれていることが挙げられます。航空宇宙工学と聞くと、日本では推進・流体・制御・構造という枠組みが一般的と考えることが多いと思います。当学科は、このような厳密な境界線はなく、プロジェクトごとに研究活動が行われています。また、宇宙科学系の研究が盛んに行われている点も当学科の特色の一つです。

研究機関・企業とのパートナーシップは、当学科における研究で重要な役割を果たしています。NASAをはじめとする航空宇宙関連の研究機関、BoeingやLockheed Martinなどの民間企業との関わりは深く大規模なプロジェクトを形成しています。宇宙科学では、その他にNational Center for Atmospheric Research (NCAR)やNational Oceanic and Atmospheric Administration (NOAA)などとの共同研究が盛んに行われています。中には、日本人がアレルギー反応を示す軍事的なものも多く存在します。このようなパートナーシップによって膨大な資金や研究の機会が生まれるため、教授のみならず学生も外部機関との共同研究に参加しています。

現在行われている主要な研究は、大きく5つの分野に分かれています。それぞれの分野を、ポスターに沿って左から順に紹介します(次頁参照)。

2.1. Aerospace Engineering Sciences

システム・構造・流体等の様々な分野が集まり、航空宇宙機の研究から開発までを手掛けています。航空宇宙機的设计・開発する研究拠点はResearch and Engineering Center for Unmanned Aerial Vehiclesと呼ばれ、現在は無人航空機の開発が進められています。この分野は、Structures and Materials 分野との共同研究が非常に盛んに行われています。

2.2. Structures and Materials

材料・流体・構造解析の基礎研究を盛んに行っている分野です。構造・空力・熱システムなどの物理現象を複合的に取り込んで航空宇宙機周りの挙動を解析する研究が有名です。また、材料関連では、航空宇宙機に適したナノ材料の研究も行われており、次世代材料の研究・開発が行われています。

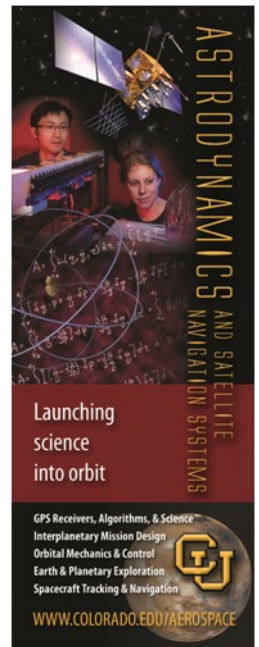
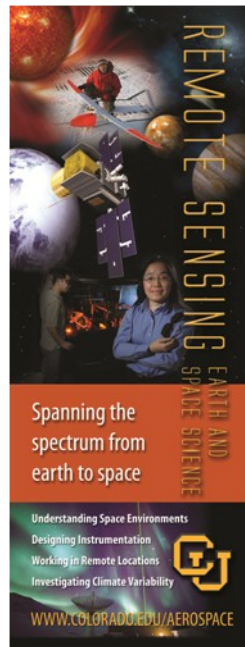
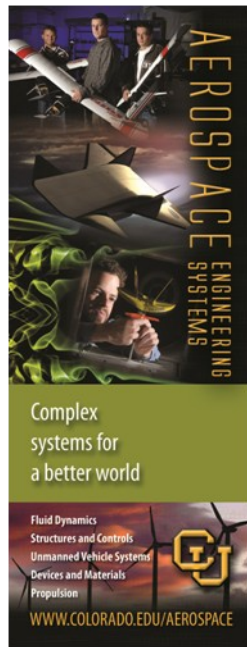
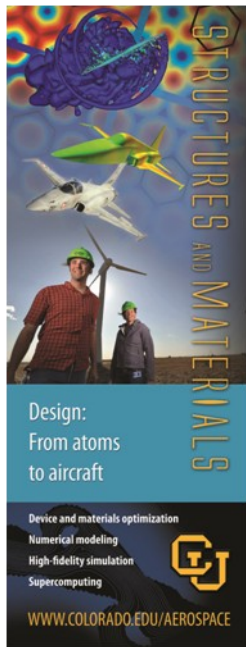
3. Bioastronautics

有人宇宙飛行技術の研究・開発を行っています。(元、現)宇宙飛行士であるJoe TannerとJim VossがFaculty memberとして教壇に立っていることでも有名です。この研究分野にはBioServe Space Technologyという研究拠点があり、宇宙空間における微重力環境の生物や細菌への影響、有機物の変化について研究を行っています。Space EngineeringとBiologyが融合するこの分野では、Life scienceとして基礎研究から応用までを手掛けています。基礎研究として、International Space Station (ISS)などで行われてきた無重力実験の実績は世界的に評価されています。また、技術面でも、様々な関連機器を開発してきたことで高く評価されています。近年は、こうして得られた知見や技術を生物・医学的観点から商業化させることに力を注いでいます。

4. Remote Sensing Earth and Space Science

宇宙科学を主な研究対象としており、地球の気象や太陽を観測することで地球と太陽の関係を解明しています。理学的色彩の強いこの分野では、実際に物理学科出身の教授・学生が多数を占めています。この分野では、先に述べたNOAAやNCARなどの研究所や物理学科との共同研究が盛んに行われています。現在盛んに行われているプロジェクトの一つに、南極での大気観測などがあり、宇宙科学における牽引役となっています。一方で、宇宙工学とも強い繋がりを持って、次に述べるAstrodynamics and Satellite Navigation分野では、この分野との共同研究が盛んに行われています。

学科紹介(続き)



2.5. Astrodynamics and Satellite Navigation Systems

本分野は、私が所属する研究分野です。この分野ではAstrodynamicsに関連する研究を中心に行っています。Astrodynamicsは宇宙力学と訳されますが、Newton力学に従う宇宙空間で起こる運動の全てを扱っています。理論的な側面を含む一方で、宇宙探査機への応用も行われており、研究領域が広いのが特徴です。Colorado Center of Astrodynamics Researchはこの分野の研究拠点であり、理論解析を行うグループ、GPSに特化したグループ、宇宙探査機の軌道決定を行うグループ、またRemote Sensingなどを活用して大気観測を行うグループがあります。GPSグループそして大気観測グループは、先に述べたRemote Sensing分野との繋がりが強いです。ちなみに、私は理論解析グループに所属していて、日々宇宙で起こる物理現象を考えています。当学科ほどAstrodynamics関連の研究を大規模に行う研究拠点を有する学科は少なく、世界的に高い評価を受けています。

3. 過去から未来へ

1930年、CU Boulder に初めてカリキュラムとして航空工学が登場しました。当時は、「戦争」と関連して空軍との関係が強く、戦闘機に搭載するエンジンの開発やパイロット養成を行う訓練学校としての役割を果たしました。戦後は、航空機を中心とした流体・推進関連の研究が盛んに行われました。1960年以降からは、本格的にSpace Engineering & Science分野が取り込まれ、研究の色彩の強い今の学科に成長してきました。

大学の方針として、現在、Flagship2030が進行しています。これは2030年を目指してCU Boulderが拠点となる研究を重点的に強化するという計画です。大学全体から全部で5つの研究分野が採択されましたが、そのうちAerospace と Geosciencesが含まれています。これは、当学科が取り扱う研究分野です。2012年には新たな研究施設が加わり、その規模が拡大する予定です。このような事からも、当学科は今後さらに拡大してより高いレベルの研究が行われるようになるでしょう。

4. 学科の教育プログラム

当学科は研究を行う上で優れた環境を提供していますが、それだけでなく「学生の可能性を生み出す」教育プログラムも充実しているのも魅力的です。その一つを紹介すると、「起業支援」というものがあります。これは、学生が会社を立ち上げることを支援するプログラムです。約200~400万円前後の支援を受けることができます。このような制度は日本で在籍していた大学にはなく、私が驚いたものの一つです。競争倍率が高いプログラムですが、学生が起業したという話はよく聞きます。研究職を志望する私ですが、今後の研究活動の中で活用していきたいと考えています。

最後に

CU-Boulder Aerospace Engineering Scienceでは、プロジェクトに関連した研究が盛んに行われており、その研究分野は興味深いものがたくさんあります。規模が拡大する点からも、航空宇宙関連の研究環境として最高であると思います。また、教育プログラムも充実しており、学生生活を過ごす上で有意義となることでしょう。この紹介で、CU-Boulder Aerospace Engineering Scienceに興味を持っていただけると嬉しいです。質問がありましたら、hirabayashi.masatoshi [at] Colorado.eduまでご連絡いただけると幸いです。

注) A. 掲載されている事柄は、学科のホームページ(<http://www.colorado.edu/aerospace/index.html>)、学科内で催されるセミナー、職員とのやり取りで得た情報をもとにしています。

注) B. 使用しているポスターは、Aerospace Engineering Science、University of Colorado at Boulderに著作権があります。

ウェブサイト

<http://gakuiryugaku.net/>

【ニュースレター編集部】

小野 雅裕
原 健太郎
平林 正稔
工藤 朗
大久保 達夫

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、留学体験記や各種のコラム(わが街紹介、学科紹介、お薦め本等)を執筆してくれる方を募集しています。

ご興味のある方・お問い合わせ等は、上記編集部までご連絡下さい。

編集後記

・2010年12月号「大学院留学に関する一般情報」に関してメールにてご指摘を頂きました。サイエンス系、エンジニア系、経済系などそれぞれの分野、また各大学・各学部によってRA/TAなど給与体系・学位取得までのスケジュールなど異なります。多種多様な「大学院留学」について出来る限り紹介していきたいと考えています。ご意見ありがとうございました。

・毎日新聞(本ニュースレター1ページで紹介)の記事にメンタープログラムとニュースレターに関してご紹介頂きました。「米国国際教育研究所によると、08年に米国留学していた日本人(高校生以下を除く)は3万人弱。統計が残っている中では最多だった97年の6割まで減少した」これは一つのデータに過ぎ

お薦め本

『天地明察』

沖方丁・著

(角川文庫)

江戸時代の日本を舞台に繰り広げられる、刀を抜かない真剣勝負！ 碁打ちにして数学者、“渋川春海(しぶかわはるみ)”の波瀾万丈の生涯が小説になりました。

碁打ちの名門に生まれ、若くして名を馳せていた晴海は、その腕を買われて江戸に参上します。彼には一か所、どうしても立ち寄りたい場所がありました。それが金王八幡宮という神社。当時の江戸の数学者たちの聖地です。彼にはもう一つ、数学という趣味があったのです。

時間もないのにわざわざ神社までやってきた晴海は、奉納された数多くの算額の前で、しばらく惚れ惚れとして立ち尽くしました。ところがそこに一つ、どうしても解けない難問が。頭をひねり、首をかしげて考えるものの、とうとう時間が無くなってしまった晴海は、しぶしぶ待たせていた駕籠に戻ります。そこで、彼は神社に刀を忘れてきてしまったことに気付いたのです。

慌てて刀を取りに戻った晴海の目に入ったのは、なんと、ものの数分の間に解かれてしまった難題の算額と、そこに残された回答者の姓、“関”。自分を超える数学の才能を目の当たりにして、晴海の心は奮い立ちます。

そして江戸で春海を待つ数々の出会い。圧倒的才能を持ち、晴海に対して闘争心をむき出しにする碁の好敵手、本因坊道策。算額の塾長として春海を支える村瀬義益。春海に厳しく接しながらも、その行く末を案じる村瀬の妹、えん。高いカリスマ性を持ち、若くして大老にまで上り詰めた保科正之。さらには「回答さん」こと、日本数学史を代表する天才も登場。数学ファンなら思わずにやりとしてしまうこと間違いなしです！

慣れない江戸の生活に苦勞しながらも、なんとかその日を暮らしていた晴海は、ある日上司である保科に呼び出されました。何を言われるのだろうかとびくびくしていた晴海に、保科は授時曆改曆という、歴史的大事業への参画を命じます。

そこから晴海を待ち受けていたのは、苦難の連続でした。歴史的偉業の立役者となるか、前代未聞の笑われ者となるか。高みを目指し、満身創痍になりながらも、歩みを止めない渋川春海の生き様を、どうぞご覧ください！

工藤 朗 (MIT)



ないものの、たしかに日本人留学生(特に学位取得目的)は減少しているのかもしれませんが。活動の輪を広げていきたいものです。

・2011年秋入学のアドミッションも結果が出始めているでしょうか。皆様のご成功をお祈りしています。また第一回メンタープログラムの結果も2011年春(予定)にご報告致します。

・本Newsletterへのアクセス回数が1号あたり1000アクセス程あることが判明致しました。将来的には、体験記や学科紹介などを書籍という形で出版できたらいいな、とNewsletter班では話しあっています。もし執筆や編集・校正などに興味がございましたらご連絡ください。ご意見などのFeedbackもNewsletter内でご紹介していく予定です。